





力バー・□絵・本文イラスト  
ち

「ゲームの中にはこの世の全てが詰まっている」と、瀬川世一は言った。

「あるいは、この世の全て以上のことさえ」

「世一はゲーム好きだ。ファミリーコンピュータから連続と続く、いわゆるビデオゲームの類いが大好きだ。

時に世界を救う旅に出て、時に暗殺者となつて標的を追う。時にモンスターを狩り、時にモンスターとの絆を育む。名探偵となつて謎を解き、兵士として戦場で命を賭け、武将として史実を覆しストリートで格闘を繰り広げ数多の恋から真実の愛を見つけ競走馬を育てて重賞を制し市民が住みよい街とは何かを考え戦闘機や巨大ロボットに搭乗して敵機を撃ち落とし森や荒野を切り開いて自分がけの街を築き上げサバイバルのためにクラフト術を学びサーキットで速さの向こう側を知つて……、そしてたった一人を救うために世界を敵に回す——

そのすべてを可能にするのが、ゲームだ。

「つまりゲームとは、人間の想像力が最も大きくその翼を広げた場所に他ならない」

世一はメガネを指先で押し上げ、目の前——春の日の中で逆光となつた人影に向かつて呟く。

背中をびつたりと、学校の扉に密着させたまま。

「もちろん想像力だけじゃない。詳細な知識と芸術的センス、そしてイメージを形にする技術力……人を人たらしめる全てが注ぎ込まれていると言つてもいい。そう、ゲームは悠久の歴史の中で育まれてきた人類文化の、極致にして最先端なんだよ」

世一の話を聞いているのかいないのか、人影はじり、と一步こちらに足を踏み出した。人影の側頭部で結われた長い髪が、不穏に揺れる。

世一は思わず肩を震わせ、磁石に引かれる砂鉄のように、背中をさらに強く扉に押し付けた。首筋を冷や汗が伝うのを感じながらさらに捲し立てる。

「そ、そんなわけだから、ゲームを楽しむのは文化的な人間であるならば当然のことなんだ。中には先端を行き過ぎるあまりライトユーザーに受けずツップの座を逃してきた、いつだつて一〇年早い悲しき業を背負いつつもファンからすれば称えずにはいられないゲームメーカーさんあるくらいで」

「今日こそ」

「ひい！」

ついに人影が——少女がぼそりと呟いた。その時には、世一はつま先立ちになつて扉に張り付いていた。

少女が握った拳を、もう一方の手で包んだ。拳がゴキゴキと不吉な音を鳴らす。

「今日こそ世一に、友達作らせるから」

「そんな殺気立つて言うセリフかそれは!?」

少女は世一の言葉に聞く耳持たず、じつとりとこちらを睨み続ける。サイドテールに結つた長い髪と、ことあるごとにたゆんと揺れがちな胸部が特徴的な女子。身を包む制服のデザインは世一と同じだ。

まだ放課後になつて十分足らずの時間で、校門の周りには二人以外に生徒の姿はなかつた。「高校入つてもう一ヶ月になるつていうのに、世一がクラスにまだ友達いなないつていうから、私の友達紹介することになつたよね？」そう決めたよね？ なのにそれから毎日毎日逃げ回つてくれて、この幼馴染は……！

「と、とりあえず落ち着け、千依」

確かに世一と彼女——丹羽千依は幼馴染で、それこそ赤ん坊のころからの知り合いだ。瀬川家の隣家の一人娘で、小中学校はおろか、この春には同じ高校に進学している。

生まれた病院まで一緒に保育器の中でも並んでいたというのだから、ここまで行くと腐れ縁にも程がある。

幼馴染をどうにか落ち着かせようと、世一は両掌を彼女に向ける。

僕は友達を紹介して欲しいなんて言つた覚えはないし、今日だつて早く帰つて新武器の解放クエストをやらなければならないから——」「そんな義務を負つた人間はこの世にいないっ！」

「痛い！」

千依が鋭く頭を振ると、サイドテールがべしつと世一の横顔を打ち据えた。

「世一はずれたメガネを押し上げながら呻く。」

「く……相変わらずモーションの読みづらい尻尾攻撃。攻略の糸口が見えない……！」

「ゲーム脳の言語でぶつぶつ言わないの！ ゲームをするなつてわけじゃないけど、世一の場合、朝から晩までゲームゲームゲーム……高校生になつたんだから、他にやることあるでしょ!?」

「おお前は僕の母さんか」

「そのママさんやパパさんが海外に行つちやつてるから私が言つてるんですけど何か!?」

「いえ何も！」

視線の圧力に思わず顔を逸らすと、千依が肩をがつちり掴んできた。そしてにつこりと微笑む。掴まれた肩の骨がミシミシ鳴いていることにさえ目をつぶれば、その笑顔はタンポポのように愛らしかつた。

「それじゃ、学校戻ろつか？ 大丈夫、ちゃんと男子も紹介するよ？」

「ちょ、ちょっと待つてくれ。間違つてホントに友達なんて出来た日には、ゲームをする時間

が削られ——」

「あん？」

「この幼馴染怖い」

タンポポ系笑顔のまま凄まれて、世一は頬を引きつらせる。

(ま、まずい……これは難易度の高いクエストだぞ……)

思わずゲームになぞらえる世一。クエスト名は『幼馴染から逃げきれ』か『友達を紹介されるな』といったところで、クエ開始のきっかけは数日前に千依が、クラスに馴染めたかとかそんなことを世一に聞いてきたことだつた。

深く考えずにありのままを伝えた結果——まあ、こういうことになつてゐる。

このまま連れて行かれたら、千依のことだ、うまいこと自分の友人と世一との橋渡しをするに違ひない。彼女はそういうスキルを持つたヤツなのだ。  
すごく困る。

(ただでさえやりたいゲームが没落してゐるのに、友達なんて時間を吸われるもの……冗談じやない)

ゲームは一日一〇〇時間、しかしひゲーム以外は省エネ——それが世一の信条だ。

(だというのに、なんでこいつは今さら……僕に友達がいないのなんて元から……ん？ 待てよ？)

いや、

ふと思いつて、世一は顔を伏せて一考した。それから唇の端を吊り上げる。

（いいだろう。僕のスキルを見せてやる）

「なんか悪い顔してるけど？」

「い、いやつ？ してないぞ？」

慌てて微笑を引っこめ、世一は咳払いをしてこまかした。千依の懷疑的な視線を無視して、すぐに言葉を続ける。

「言つておくが、僕にだつて友達はいるぞ？」

「ほーう。じゃあその人、私に紹介してみよつか？」

「あ、あからさまに信じてないな。だが紹介する必要もない。その友達というのは、お前のことをだらな、千依」

「ん？」

何を言いだすのかとばかりに眉を顰める千依。

「それは幼馴染だし、そうだろうけど、でも――」

「僕にはそれで十分だ」

「へう!?」  
真面目な顔で言う世一に、千依がぎょっと後退った。

「え、いやつ、ええ!? い、いきなり何言つて……！」

「僕にはそれで十分だ」

「へう!?」

何を言いだすのかとばかりに眉を顰める千依。

「それは幼馴染だし、そうだろうけど、でも――」

「僕にはそれで十分だ」

「へう!?」

真面目な顔で言う世一に、千依がぎょっと後退った。

「え、いやつ、ええ!? い、いきなり何言つて……！」

「僕にはそれで十分だ」

「へう!?」

何を言いだすのかとばかりに眉を顰める千依。

「それは幼馴染だし、そうだろうけど、でも――」

「僕にはそれで十分だ」

「へう!?」

何を言いだすのかとばかりに眉を顰める千依。

「それは幼馴染だし、そうだろうけど、でも――」

「僕にはそれで十分だ」

「へう!?」

仲間であり、仲間の存在は周囲プレイのために組んだよく知らないプレイヤー一〇〇人に勝る！まあ僕はどちらかと言えば一人プレイ用の据置機ゲームの方が好きだが、それでも……」

いつの間にか話に熱が入つてしまっていたが、そんなことより、目の前の千依の様子がおかしいことに気づいて世一は眉を纏めた。

「わ、わた……私がいれば十分だなんて……」

千依は顔を俯かせたまま、赤くなつた頬を両手で挟んでいた。今の熱弁も聞こえていなかつた様子だ。

「わ、わた……私がいれば十分だなんて……」

千依は顔を俯かせたまま、赤くなつた頬を両手で挟んでいた。今の熱弁も聞こえていなかつた様子だ。

「お、おい、千依？」

「いやつ、その、うん！ それはね、確かにね、わた……私、も……いやいやいや！」

千依がそのまま身体をくねらせ始めるものだから、世一はちょっと引いた。が――

(あれ？ チヤンスか？)

何の状態異常なのか知らないが、今の千依は背後を――世一のことを見ていない。(これなら……)

試しに、世一はそろそろと壁伝いに移動してみた。

「ちょ、ちょっと待ってね！ 突然だから、こ、心の準備とか、あの……！」

千依は意味の分からないことを呟くばかりで、こちらの動きに気づかない。

よし、と胸中で唸つて、世一は扉に背を付けたまま校門を目指す。門はすぐそこだ。

(よく分からぬが、どうやら僕のスキルが功を奏したらいいな。このまま逃げればこのクエは完了――いや、このイベを回避してもクエ自体は完了とはならないか。だが、少なくともこの場は、僕の勝ちだ！)

「あ、でもね、それはそれとしても、やつぱり友達はいた方がいいと思うんだよね。だつてせつかく高校生になつたわけでしょ？ もちろん世一が好きなら、ゲームもいいんだよ？ いいんだけど、少しくらい青春っぽいことして、思い出作るべきじゃないかな？ ほら、その……わ、私も一緒に……ね、世一！」

最後の一言と同時に、千依はタンポポのような笑顔と共に振り返つた。一瞬壁と向き合つたものの、その視線がすぐに校門に向く。

「あ……」

笑顔の千依と目が合つて、世一は呻いた。すでに校門の石柱までは辿りつき、半歩、学外に出ているところだった。

千依が笑顔のまま首を捻り、世一は思わず石柱に背中を貼り付ける。

「ちが、違うぞ、千依これは——」

「貴様、逃ゲルタメニ、適當吹イタカ?」

「いやいやそんなことはないというか微妙に言葉がおかしなことになつてませんかね!?」

「世一? 肋骨ろうこつつて片側一二本、左右で二四本あるよね?」

「は? あ、ああ、まあ……そつらしいな? それが?」

にこにこしながら、千依はゆっくりと両の拳を構えた。美しい構えだった。

次の瞬間、千依の顔から笑みが消え失せ、鬼と化す。

「三本選べ」

その三本をどうするつもりなのかは聞かないでおくことにした。

「し……」

慌てて後退ると、世一は素早く校門前の道に視線を走らせた。滅多に車の通らない公道は、今もガランとしている。

突き放すように校門の石柱から離れ、世一は走り出した。こうなればスキルもなにもあったものではない。ただ逃げるのみだ。

「しくじつたあああッ!」

「逃がすかあ!」

鬼が追つてきた。

世一は久しぶりに全力で走った。

幼少の頃よりスポーツ万能で鳴らした幼馴染からどうにか逃げ切れたのは、暗殺ゲームで培つちかつた逃走技術のおかげに違いなかつた。

クエスト完了とはいかなかつたものの、まあ、なにはともあれ——

ゲーム万歳、だ。

# 1. 瀬川くんのリアルクエ

Segawa-kun ha  
GAME dake  
shiteitai.

ゲームーーの朝は遅い。

前日の就寝からして遅いからだ。  
一度ゲームをする態勢に入つてしまつと、中途半端なところで切り上げるのにはそれなりの自制心を要する。そして瀬川世一はことゲームに関しては、自制心のなさに自信があつた。

そのため毎日のように遅い時間にベッドに潜ることになるし、翌朝起きるのは、いつもギリギリの時間だ。早朝から活動しているときがあるとすれば、ゲームに熱中し過ぎて徹夜してしまい、寝るに寝られなくなつたときくらいだろう。

「昨日は散々だつたな……」

洗面台の鏡に向かつて欠伸しながら、世一は頭を搔いた。数分前に起きたばかりだが、既に制服を、着ているのか身体に巻いているだけなのかよく分からぬ状態で身に着けている。メガネも装着済みだ。

目立つた特徴もない自分の顔立ちには興味を示さず、機械的に歯磨き洗顔、それに伴うメガネの着脱をこなしていく。

「リアルの運動は性に合わないつていうのに、まつたく」

昨日は千依を振り切るのに、町内一周分は走つた気がする。しかも千依と世一はお隣さんなので、振り切つたからといってすぐに家に帰るわけにもいかない。結局は携帯ゲーム機を片手に、人気のない神社へ向かつた。

やがて日が暮れかけた頃に帰宅。P.C.のネットで新武器の解放クエに挑むも、クエスト完了まで至らぬまま睡魔に襲われ——今に至るというわけだ。

「僕としたことが、大事なクエを中途半端に放り出すことになるとは……」

「それもこれも、幼馴染に追いかけ回されたせいだ。

「千依の世話好きにも困つたもんだ」

ここ最近の千依の行動を思い返して、世一は嘆息した。

中学の頃からそうではあつたが、最近の彼女は輪をかけて世一の世話を焼こうとする。だいたい三週間ほど前から——ちょうど世一の両親が、仕事の都合で一時的に海外に転居した頃からだ。

「母さんに何か言われたんだろうなあ」

きっと渡航間際に母が、息子をよろしくとも言つたのだろう。千依は根が素直なので、それを眞面目に受け取つたのだ。

世一と千依双方の両親は、二人が生まれる以前から氣の合う隣人だつたらしい。同時期に子

供が出来たことでさらに付き合いが深くなり、今では家族ぐるみの仲良しさんをやつてている。そのおかげで世一と千依も、物心つく前から一緒に遊ぶ仲だつたわけだ。

洗面台のある脱衣所を後にしながら、世一は小さく肩を竦めた。

「難解なクエが始まってくれたもんだ。僕は楽しい学校生活より、楽しいゲームをしてみたいっていうのに」

世一はゲームが好きだ。そして両親不在の今、我が家には世一のゲーム好きに小言を言つるのは誰もない。

片耳にイヤホンをし、もう片耳を廊下を近づく足音への警戒に使いながらPCゲームをする必要もない。図書館で勉強すると言つて、ノートの間に携帯ゲーム機を挟んで出かける偽装もない。夜中にベッドを抜け出して、暗いリビングで排気音の大きさを気にしながら据置機をプレイするという、心臓に悪い行為ともおさらばだ。

「そ、今やこの家はゲームし放題の夢空間。リアルのクエストなんぞに決してジャマはさせないぞ、くつくな！」

寝起きの妙なテンションで一人笑いながら、世一はキッチンで冷蔵庫の扉を開けた。中はがらんとしていて、調味料の類と飲み物しか見当たらない。

「そもそも、ゲームはすればするほどいいに決まっている。ゲームとは今も進化を続ける遊びの大宇宙にして、戦いの荒野。作品によっては遊戯性を備えた総合芸術と言える。感性を

磨けて、知識を吸収できて、しかも楽しい——こんな素晴らしいエンターテイメントが他にあるというのか？いや、ない！」

昨日とはまたちよつと違うゲーム持論をぶつぶつと呟きながら、確信を込めて頷く世一。

「まあ確かに、ドヤ顔でSNSに投稿して自分がいかにセンス溢れる洗練された人間かをアピールしたいなら、映画やら音楽やら演劇やらの方がふさわしいかもしれない。だが自分の腕前を上げる喜びを知らずにただ享受するだけのエンタメで満足するなど、僕にはできないのだフハハハッ……あー、まずい眠いぞ？」

自分でもちよつとおかしくなつていると自覚できるほど眠い。

とりあえず頭を正常に働かせるため、世一は炭酸飲料のペットボトルを掴んだ。届めていた

背筋を伸ばしながら冷蔵庫の扉を閉めると——

「へー。そうなんだ」

すぐそばに千依が立っていた。

「うおおツ——おご！」

驚いて飛び退いた拍子に、キッキン台に腰をぶつける世一。

ひとしきり痛がつたあとで顔を上げると、やはり千依はそこにいて、腰に両手をあてて仁王立ちしていた。

高一女子としてはおそらく平均的な身長。面立ちにはまだ幼さが残るもの、凜とした空氣

を纏つて見える。長い髪はリボンでサイドテールにまとめられ、肩の上まで垂れていた。  
ほつそりと引き締まつた体躯ではあるが、ただ一点、胸部だけは平均を軽く凌駕する成長ぶりだ。僅かに胸を張るような姿勢でいるせいか、動きやすさ重視の伸縮性のある素材でできたジヤケットが、滑らかで柔らかそうな球状に張り詰めている。

毎日顔を突き合わせているとはいっても、二～五次元に慣れ親しむ身としては、ちょっと迫力があり過ぎる。が、千依の冷やかな瞳を見ると、そんな気分も吹き飛んだ。

そして次の瞬間、千依の姿がふっと視界から消えていた。

「え？ なんだ、僕は幻でも見て——うごあ！」

もちろん寝ぼけた頭が見せた幻などではなく、幼馴染は素早い身のこなしで世一の脇に回り込んだだけだった。

頭に細い腕が絡みついてきて、そのまま引きずりおろされる。世一は腰を曲げただけで、倒れるのはどうにか免れた。が――

「おはよう、世一。今日は逃がさないから」

側頭部をぎりぎりと締め付ける完璧なヘッドロックが、世一を捕えていた。

「オ、オハヨウゴザイマス千依さま！ ただこれはちょっとアレだぞ！――当たつてるぞ!?」見事な技のキレではあるものの、千依に限つては威力半減だろう。いくら腕の締めつけをきつくしても、逆サイドでは頭部が柔らかい塊に――たわわと育つた胸に埋もれるばかりだか



らだ。

なので当たっているどころの話ではないのだが——  
「う、うるさいつ！ こうでもしないとまた逃げるでしょ！」

千依はさらに強く腕を締め、世一の顔を胸に押し付ける。制服と、張りがありつつもふわふわした弾力越しに、千依の心臓が早鐘はやかねを打つのが聞こえてくる。

「分かった、逃げない！ 逃げないから——って」

締めつけと柔らかさの同時攻めに世一もパニック気味だったが、わずかに残った冷静な部分が、はっと大きな疑問に行き着いた。

「じゃない！」

「きやう！」

千依の柔らかさを利用して、すばんと頭を抜く。

世一は素早く後退しながら、幼馴染に指を突き付けた。

「なんでいるんだ僕の家に！」

「世一のママさんから合鍵預あいかりかってるからだけど!?」

「聞いてないんだが!? 逆ギレ気味にそんな重要なことを明かされても困るんだが!?」

「私だっていつ言い出そうか結構悩んだよ！ ママさん、世一にはこのこと教えてなかつたみたいだし！」

千依は千依で、顔が真っ赤になっていた。

「そ、そもそもなんでもうちの親がお前に合鍵を渡すんだ……」

確かに世一の両親と千依は仲がいい。世一と千依も、半ば兄妹もしくは姉弟のように育つたわけだが——だからと言つて合鍵まで預けなくてよくはなかろうか。

千依は嘆息して、制服の乱れを直した。まだ頬に赤みが差しているものの、ひとまず落ち着いたらしい。

「なんでもなにもないでしょ。ママさんには『あの子に一人暮らしさせたらヤバイことになるに決まってるからホントにお願い。いやホントに』って、マジトーンで言われたよ？」

「はあ？ 何を言つてるんだ母さんは。僕が一人暮らしことの、どこがヤバいつて言うんだ？」

「世一が首をひねると、千依はじつとりとした視線をキッchen台のペットボトルに向かえた。

「うん、今日の朝ごはんは何？」

「コーラだな」

「……昨日の夜は？」

「パンの耳と具のない味噌汁みそじるだつたか？」

「さ、最後にまともに野菜を食べたのいつ？」

千依の頬が引きつったものの、世一は気にせず正直に応えた。

「覚えてないな。野菜って高くないか？ ゲームし放題記念にちょっとネットゲとスマホゲーに課金し過ぎて今月の仕送りがもう残り少ないと、手が出せないんだよなあ。というかパンの耳が切れたから補充しておかないと、味噌と水分だけで残り日数の生存はさすがに難易度高いと——」

「早くもヤバいことになつてるじゃない！」

「なにイコのことだつたのか!?」

母が何を危惧していたか突然悟る世一。千依がさらに声を張り上げた。

「つていうか一人暮らし始めた途端、そんなことになるまでゲームにお金使つたの!?」

「しまつたつい正直に！ なぜいつもありのままを話してしまうのか僕は！ 自分で思つていい以上に心がきれいなせいで嘘が叶わぬのか!?」

「迂闊なだけだよ！ ホントにこの幼馴染は……！」

「ま、待て千依！」

幼馴染が眉を吊り上げて一步踏み出したものだから、世一はさつと後退つた。

「あ、あのですね、新装備でファイアードに出かける高揚感はプライスレスであつてデスネ」

「課金してたらプライスレスじゃないよね？」

「う……し、しかしだ、世の中には製品版でありながら後のアップデートでのバグ取りや大幅調整を前提にしたいわば有料<sup>ペイ</sup>みたくなりリースの仕方をしているゲームだつてあるわけでそ

れに比べたら全く良心的で——」

「よく分かんないけどとりあえずうるさい！」

「痛い！」

千依のサイドテール攻撃が世一の顔面を捉える。ゲーム界を憂う世一の訴えは届かなかつたらしい。

「まったく！ ホントにまったく、もう！」

千依が素早く近づいてくるなり、両手で世一の顔を挟んだ。今度はヘッドバットでも飛んでくるのかと、世一は「ひい！」と思わず身を強張らせる。

だが予想に反して——というより予想だにしなかつたことに、千依は親指で世一の目の下をもにゅもにゅとマッサージし始めた。

「こんなクマまで作つて。どうせ昨日も遅くまでゲームしてたんだしよ」

千依が世一のクマをもにゅもにゅし続けながら、キッチンからも覗けるリビング——その一角に、非難じみた視線を送る。リビングはきれいなものだが、大きめのテレビの前だけは床に置かれた複数の家庭用ゲーム機を、絡まり合つたコードが取り回んでいるという混沌としたありさまだつた。

「いや、昨日は——」

「やらなかつたの？ それてもしかして、私を騙したことを気に病んで……」

「据置機じやなくて、自分の部屋のPCでネットゲをいだだだだだつ！ 入るツ、それ以上指を押し込むと先っぽが眼球の下に入るぞ千依ソ！」

「瞬ばつと輝いた千依の瞳が、今は殺氣を湛えていた。メガネがずれてよく見えなかつたが。『そうだ思い出した！ 騙して悪かつたとも思つていたんだつた、昨夜は！ いやあ心が痛かつたなあ！』

「ホントに？」

「まあ嘘なんですけど入る入る入る！ いや、すみません本當です！ 本當なんですちょっと茶目つ気を見せるタイミングを間違えただけですから千依さん！」

「生來の正直さを意志の力で抑えつける世一。そんな世一を千依はしばし睨んでいたが、やがて手を放して、深々と溜息を吐いた。

「まあ、そういうことにしといてあげる」

「た、助かった……」

「つていうか実は昨日は、私も反省してたし」

「は？」

意味が分からず、世一はざれたメガネを直しながら眉を顰めた。

「どういうことだ？」

「昨日世一を見失つた後、最初は合鍵使つて家で待ち構えてやろうつて、部屋を暗くしたままで

「でも家に向かつてる途中で、やつぱり無理やり友達を作らせるつていうのは、よくなかったかなあつて思えてきて」

「ん？」

意外な言葉に、びくりと動きを止める世一。

「今、とても重要なセリフが聞こえた気が……」

「ママさんに頼まれて、少し気合い入れ過ぎたのかも。なんか、ごめん、ね？」

世一の呟きが聞こえた様子もなく、千依が窓うようにこちらを覗きこんでくる。

「あ、いや……というか——」

世一は言葉を詰まらせてから、確認するよう口を開いた。

「そ、それはつまり、だな。もう僕に友達を紹介するつもりはない——ということか？」

「え？ うん、そう言つたつもりだつたんだけど」

「クエスト完了ツッ！」

「ひあツ！」

思わず拳を握った世一に、今度は千依が飛び退いた。

「い、いきなりどうしたの？ 大丈夫、世一？」

「もちろん大丈夫だ。まさか労せずして高難度クエをクリアできると思わなかつたものだから、ちょっとはしやいでみた」

「よく分かんないけど、あの……怒つてはない、の？」

「むしろ気分が高揚します」

「それはそれでなんか怖いんだけど!?」

もちろん迷惑でなかつたと言つたら嘘になるし、煩わしく思わなかつたわけでもなくはなく、ならない。だがゲーム三昧の日々が邪魔されずに済むことが分かつた以上、今さらどうこう言う気はしなかつた。

「いやあ良かった。本当に友達なんて作らされたらどうしたものかと思つていたんだ」

「た、確かに無理やりはダメだったかもしれないけど、その考え方はどうかと思うんだけどなあ。とにかくそろそろ出なきやいけない時間だし、ちゃんと用意して」

再び溜息を吐くと、千依は緩んでいた世一のネクタイに手を伸ばした。幼馴染にタイのバランスを整えられながら、世一は大きく頷いた。

「奇しくも『逃走』が正解の選択肢だったとはな。負け確いベジやなくて良かつたが……まったく、クエストはゲームの中だけにしてほしいもんだ」

「そのゲーム脳の言語やめてよ、もう。さつきから何の話かよく分かんないし。それに言つて

おくけど——」

緩んでいた世一のネクタイをキュッと締め、さらにしわを伸ばすように制服を叩いてから、言葉を続ける千依。

「友達作りは置いておくにしても、世一の生活は、これから厳しくチェックしていくからね？ 私が合鍵でいつでも抜き打ち検査にされること、忘れないように」

「…………」

そうだった。

上昇したアドレナリン値が急降下し、世一は頬を引きつらせた。

「あ、合鍵はチートアイテム過ぎて対処できないんだが」

合鍵奪取クエスト——にすらならない。

まさか金欠の今、錠の交換や追加など出来るはずもないし、万一出来たところでそのことを母に報告されたら痛い目を見るのは世一だろう。

千依が勝ち誇った微笑を浮かべる。

「ふつぶーん、そうでしょうそうでしょう。分かつたら私の抜き打ち検査を常に恐れ、日々健康で文化的な高校生活を送ること。ね？」

「ゲームは十分文化的なんだが。むしろ文化の先端なんだが」

「だとしてもゲームに一極集中し過ぎ。何事も過ぎたるは及ばざるがごとしつて言うじゃない」

「それは違うぞ、千依。広く浅く……そんな表層をなぞるだけじゃあただ情報の海に溺れるだけだ。その分野の歴史を知り、体系を学び、誰の起こした革新が世の中に、そして次の世代にどんな影響を与えたか——そういった全体と部分の相関関係を、マクロとミクロの両方を吸収して初めて情報は知識へと昇華する。広く浅くが悪いこととは言わないが、僕は一つの分野を究めようとする努力にこそ、真理へと繋がる道があると信じている」

「あ、はい。それでお昼ご飯は大丈夫なの?」

「流すなよ! 要するに『ひたすらゲームがしたい』と言いたいだけの僕の演説を流すなよ!」「なんならお昼用のお金貸すよ?」

「お願いしますだよ、ちくしょう!」

「世一は即座に頭を下げた。千依の懸念通り、今は昼食を買うのも厳しい財政状況なのだ。

背筋を伸ばすと、安堵の息を吐く世一。

「いやあ助かる」

「自業自得だとしても、さすがの私もお味噌を舐めて生きろとは言えないしね。優しいでしょ?」「優しい優しい。おかげで月末の新作のために取つておいてあるゲーム資金に、手を付けなくて良さそう——」

「使えそれを!」

「すごく痛い!」

「いやあ助かる」

「世一は即座に頭を下げた。千依の懸念通り、今は昼食を買うのも厳しい財政状況なのだ。

背筋を伸ばすと、安堵の息を吐く世一。

「いやあ助かる」

「自業自得だとしても、さすがの私もお味噌を舐めて生きろとは言えないしね。優しいでしょ?」「優しい優しい。おかげで月末の新作のために取つておいてあるゲーム資金に、手を付けなくて良さそう——」

「使えそれを!」

「すごく痛い!」

千依のサイドテール攻撃が、世一の顔面を打ち据えた。

「ああもう、やっぱりダメだこのゲーム脳! 見張るだけじゃなくて、ちゃんと更生させないと!」

スナップの利いた一撃に悶える世一の目の前で、千依は虚空に視線を向けながら拳を握った。

「見てくださいママさん! 私が世一に、健全な青春を送らせてみせますから!」

「あ、ダメだ火がついてる。あ、ダメだ火がついてる。

「ど、どこで選択肢を誤つた」

海の向こうの母に誓つ千依に、世一はびくびくと怯えながら呻いた。ゲーム三昧の日々に、分厚い暗雲が垂れ込めてきた気がしてならなかつた。

リアルクエスト——それはこの世の森羅万象をゲームという色眼鏡で見る世一が、現実で起きるある種の事象に付けた名称だ。

ゲームの中ではお使いからボスの討伐まで、様々なクエストがプレイヤーを待ち受けている。現実も同じだ。細かく分類するなら、朝起きて学校へ行くのも、高校を受験するのも、売り切れ必至の新作ゲームを確保することだってリアルクエストと言つて過言ではない。

そう、人生はクエストで出来ている——と、世一は思つていた。

だが実際のところ、クエストに直面したと感じるのは日々起きる事柄のうちの、ごく一部に

限られた。つまり突発的で、厄介な出来事だ。

(ゲームの中ならないぎ知らず、現実の厄介事は求めてないって言うのに……)

一限を終えたばかりの小休憩中。世一は弱り切った表情で、次の授業の準備を進めていた。

世一の席は一番廊下側の列の、前から二番目。時折話しかけようとしてくる前の席の生徒は少し離れた友達のところにおしゃべりに出かけたようで、今は視界を開いている。歓談に興じているのは前席の生徒だけではない。短い休憩時間だつて、クラスメートのほとんどは、各々が所属するグループで集まっているようだつた。

グループの数や規模に関しては、どこにも所属するつもりのない世一にはとんと分からなかつたが。

教室に渦巻くおしゃべりには意識も向げず、世一は重い溜息を吐いた。

(友達を作らされるのは回避できたものの、今度は合鍵か。どうにかできないものか……)

母も厄介なマネをしてくれたものだと、つくづく思う。

子供の頃は互いの家を勝手に行き来していたし、別に千依に家に来てほしくないわけでもない。が、合鍵が千依の手の中にあるというのは、どうにも急所を握られている気分がしてしかたがなかつた。

(とはいえ、やはり攻略可能なクエストだとは思えないな……)

世一は憂鬱そうに頭を搔き、見るともなしに教科書を開いた。

今はただ、面倒なリアルイベやリアルクエがこれ以上起きないことを、祈るしかなかつた。

丹羽千依は自分の席で頬杖<sup>ほおづえ</sup>をつき、ぼんやりと虚空を眺めていた。今日何度目になるか、呆<sup>ぼう</sup>けた溜息が唇から漏れる。

一限目の後の小休憩の最中で、クラスメートは短い自由時間を周囲の生徒と雑談を交わしながら過ご<sup>ゆき</sup>している。入学からまだ一ヶ月ほどだというのに、既に打ち解けた雰囲気がこのクラスにはあつて、いつもの千依ならそれだけでなんだか嬉しくなるところだ。だが今は、周りのことなど目に入つていなかつた。

「おいおい、どうした千依ちゃん」

「え?」

ふいに名前を呼ばれて、千依は顔を上げる。隣の席の女子が、椅子の上で身体ごとこちらを向いていた。

「朝から色っぽい溜息連発しちゃつて」

「い、色っぽいって。そんなことないよ、ユキちゃん」

ユキちゃんこと福井由紀。席が隣り合つただけで中学も違うが、今ではよく話す仲だつた。

「いやいや。相当だつたよ。息が桃色だつたもん」

「ホントにそしたら病院行くよ、私」

口からピニックの煙を吐くなんて、世一のやるゲームにだつて出てこないだろう。いや、出てくるのだろうか。よく分からぬ。

「悩み事みたいだけど、あれか？ 思春期か？ 例の幼馴染のこととか、ん？」

「う……」

「にやり」

「ち、違うよ？ ユキちゃんが思つてるようなことじゃないよ!! ただあいつはほら、私が面倒見ないと高校生の間ずっと孤立しかねないもんだから」

「はいはい。ゲーマーなんだよね、幼馴染くんは」

ユキを含めた特に仲のいい女子には、他の組に幼馴染がいて、どうやらクラスになじめていないらしいと相談したことがあつた。世一に友達を作ろう作戦に協力を頼んだ相手も、その女たちだ。結局徒労に終わつたが。

「その『分かつてるからみなまで言うな』って顔、すごく気にかかるんだけど、ユキちゃん。協力してくれようとしたのに逃げられちゃつたのは、ごめんだけど」

「気にすんなペイペイ。それより……」

ユキはわざとらしく肩を竦めた。

「千依ちゃんの『幼馴染くんと青春したい大作戦』、失敗かあ」

「そ、そんな作戦名だった覚えはありませんがっ！」

「あ、そつか。『幼馴染くんとチュッチュする仲になるためにグループ交際から始めよう大作戦』だつた」

「それがユキちゃんの最後の言葉だつた、と」

「すみません調子に乗りました！」

千依がバキバキと指を鳴らすと、ユキはすごい速さで頭を下げた。千依は桃色とは程遠い、疲れた溜息を吐く。

「まあ、青春したくないとは言わないけどさ。せつかく高校生になつたんだもん」

「だよね。JKって言つたら世界の中心、JK時代は人生の絶頂期だしね」

「そ、そこまでじゃないと思うけど。あいつ——世一にも青春を謳歌させたいんだよね。このままゲームばかりだと、なんか心配になつちやつて」

「放つておけないつてやつね。まあ分かるよ」

ユキが同情するように頭を振つた。

「最近学校の近くに迷い犬がいるみたいでさ。あたしも何度も見かけたことがあるんだけど、その度に『こいつ一人でふらふらしてて大丈夫かな』って心配になるし」

「ヒトの幼馴染を犬と一緒にしますか。確かにその犬も心配ではあるけど」

「でもさあ、あたしが思うに、今の状況って千依ちゃんにとってはそう悪いことでもないんじゃないかな?」

「え?」

「だって春といえば出会いの季節じゃん? 高校生になつたばかりのあたしたちなんて特にそう。だけども、だ。話を聞く限りじゃ、幼馴染くんは新しい出会いを求める気がゼロなわけでしょ?」

千依が素直に頷くと、ユキの頬に意地の悪い笑みが戻った。

「おジャマな虫がつかずに済むつてことですぜ?」

「む、虫つて」

「まー現状維持にしかならないけど、幼馴染くんとは今まで通りでいられるわけだから、そんなに焦らなくてもいいと思うのよ、あたしは」

「そ、そ、う、か、な?」

「そ、そ、う、そ、う。千依ちゃん巨乳だしね」

「それは関係ないでしょ?」

囁き声で顔を赤くする千依に、ユキがにっこり笑う。同時に、チャイムが教室に鳴り響いた。各グループで固まっていた生徒たちが自分の席に戻り、ユキも気だるそうに机の中を漁り始める。

「今まで通り、か……」

確かにユキの言う通りかもしれない。

世一は一事が万事ゲーム基準なので、それが治つてもつと視野が広がれば、二人の関係もちょっと先に行つたりなんかしたりして——などと期待をしていたのだが、今回の作戦は結果的に押し付けがましくなつてしまつただけな気がする。

まずは、新生活に突入しても今まで通りでいられるという、それが大事なのだろう。

(それに……)

千依は机の横に提げられた自分の学生鞄を、ちらと見やる。鞄の中には世一の両親から預かった瀬川家の合鍵が、大事にしまわれている。

思わず頬が緩んだ。

(今まで通りじゃない部分も、もうあるんだしね。これからはご飯とか作りに行っちゃつたりして……えへへつ)

今後の合鍵の活用法を妄想しながら、千依は再び視線を上げた。机に教科書を並べていくユキに微笑む。

「ありがと、ユキちゃん」

しかし後に千依は、自分の考えが甘かったと知ることになる。  
世一ならそのことについて、こう見解を述べただろう。  
『エンカウントは、望まなくとも勝手に発生する』  
と。

## NOW LOADING・・・

「失礼します。少しよろしいですか」

昼休みに入つて間もない時間。世一は机の上に置いた鞄を漁つているところで声をかけられた。

意外そうに、そして少し迷惑そうに顔を上げる世一。

「僕か？」

「ええ、あなたです」

前席の生徒は既にどこかへ行つてしまつていて、声の主である見知らぬ女生徒は、その空いた机に片手をついて世一を見下ろしていた。

まだクラスメートの顔があやふやな世一にも、彼女が別クラスの生徒であることはすぐに分かつた。彼女の髪が嘘のようなミルクティー色だったからだ。さすがにこんな際立った特徴の



持ち主は、クラスにはいなかつたはずだ。

多分。

腰まで届くくらいに伸びされた髪は、染めているようには見えず、艶やかで癖もなかつた。面立ちは整つているが、涼やかな切れ長の目以外は純日本風だ。身長も平均的。そしてクラスメートでないことを何よりも雄弁に語つてゐるのは、彼女の身を包む——中等部の制服だ。

この学校は中高一貫。高等部と中等部の校舎は隣り合つてゐるし、両方の生徒が使う共通の棟もある。世一や千依のような高校からの編入組もいるにはいるが、少数派だつた。

少女は余裕を感じさせる穏やかな微笑を湛え、どこか尊大な仕草で前髪を耳の後ろに送つた。「はじめまして、中等部三年の篠倉瑠璃です。あなたが瀬川世一さんですね？」

「人違ひだな。そいつなら向こうにいるぞ？」

「え？ そうなんですか？」

世一がそつけなく、そして適当に教室の奥を指さす。少女——ルリリは少し驚いた後、恐縮したように頬を染めた。

「これは失礼しました。私としたことが早とちりを」

「いや。じゃあ」

「はい。お手間をかけてすみませんです」

世一は立ち上ると同時に鞄を引つ掲んで、ぺこりと頭を下げるルリリの横をすり抜けた。そのまま手近な出入り口に向かう。

背後でルリリと別の生徒——まだ教室に残つていたクラスメートとの会話が聞こえる。

「ええっと、瀬川先輩を探しているのですが……メガネをかけていて、ゲームばかりしているという……え？ 今の人ですか？ ですが違うと言われ……合つてる？ はい……なるほど……もしもしかして私、さらつと嘘をつかれ……」

まづい。

世一は廊下に出ると同時に早歩きに切り替えた。昼休みは貴重なゲームタイムだ。邪魔されたくないし、それ以上に彼女が何者か分からぬ。

校内にゲーム機を持ち込んでいる後ろめたさがある以上、触らぬ神に祟りなしだ。

「ちょっと待ちなさい！ やはりあなたが——つてもうあんなに遠くに！」

後ろから追つてきた声に、世一は舌打ちして顔だけで振り返つた。ルリリが教室を飛び出し、小走りにこちらに向かつてくるところだつた。

走らない程度に速度を上げる世一。

「なんで逃げるんですか！」

「廊下は走つたらダメだぞ、後輩！」

「確かにですが、先輩の早歩きも速すぎませんか!?」

39 1. 瀬川くんのリアルクエ

ルリリはあからさまに女の子走りで、世一との差はむしろ開く一方だった。世一はひとまず安心して前方に顔を戻す。廊下を階段の方に曲がればこのまま撤いてしまえそうだ、と思った直後――

「はわあ！」

後ろで悲鳴が響いた。

再び振り向くと、ルリリが尻を突き出すような格好で倒れていた。背中や床に広がった髪が窓からの日差しを受けて煌めいている。

「…………」

どうやら何もないところで転んだらしい。

世一が思わず足を止め、廊下がしんと静まり返る。辺りの生徒たちの視線がルリリに、次いで世一に注がれた。

「勘弁してくれ……」

額を押さえて呻く世一。世一は目立つのが嫌いだ。変に目立てば、いずれ教師にまで、校内でもしばしば携帯ゲーム機を起動しているということがバレかねない。

周囲の生徒の困惑と非難の入り混じった視線を浴び続けるのも面倒だったので、世一は諦めて廊下を引き返した。

「えっと……キミ、大丈夫か？」

「えっと……キミ、大丈夫か？」

転んだきり微動だにしない後輩の傍らに屈み込む。と、彼女の手がすばやく動き、世一の手首を掴んだ。

ルリリが顔を上げて叫ぶ。

「捕まえましたあ！」

「なに！まさか転んだのは作戦だつたと――」

「そ、そのまま……うご、動かないで……ゼエゼエ……ください、先輩。ちょっと酸素が、足りませゲホゲホツ……オエツ」

「違ったな」

これはマジなやつだ——と、世一は頬を引きつらせた。

「ひ弱過ぎないか、キミ」

「イ、インドア派なので」

「ところで、キミは風紀委員か何かか？　あるいは親がこここの教師だとかPTAの会長だとか、理事長だとか」

「え？　いえ、どれも違いますけど、なんですか？」

世一はほつと胸を撫で下ろした。どうやら世一のゲーム機没収を企む何者か、というわけではないらしい。

「立てるか？　僕に何の用か知らないが、ここで倒れててもジャマそそうだから、保健室まで付

き添うよ。仕方なくだが

「ご親切に、申し訳ないです」

そもそも世一が彼女を騙したからこうなったのだが。

立ち上がりると、ルリリはふらつと壁に手をついた。さすがの世一も心配になつてくる。

「キミ、まさか何か持病があるとかじゃ……？」

「筋金入りの箱入り娘なだけで、極めて健康体です。登下校は送迎車で、我が家の中ではセグ

ウエイで移動するものですから、体力がなくて」

ただの金持ちだったらしい。セグウェイで移動するほど広い庭つてどういうことだ。

なんだか馬鹿らしくなつたものの、見れば転んだ拍子に膝を打つたのか、ルリリは片足を少し引きずつている。世一は溜息を吐いて頭を搔いた。

「とにかく保健室まで送つていく」

「お、思つたよりお優しいのですね、先輩。お金持ちなので優しくされるのには慣れています

けど。むしろ騙されたのが新鮮でしたけど」

「そうか。昼休みがもつたいないから早く行かないか？」

「そのそつけない態度も新体験なのです……が、保健室は結構です」

「なら僕はこれで」

「あなたはどれだけ愛想がないんですか!? そ、そうではなくてですね！」

即座に去ろうとする世一の腕を、ルリリが慌てて掴んでくる。

「保健室より、もっと都合のいい場所があるのです。先輩、そこまでお付き合いいただけませんか？」

「はあ……」

一度付き添うと言つた手前断りづらく、世一はしぶしぶ頷いた。

開け放たれていた扉から教室を覗き込み、千依はきょろきょろと視線を彷徨わせた。その手には巾着袋に入つた弁当箱が提げられている。

「あ、あれ？」

教室は間違えていないはずだが、教えられていた席に世一の姿は見当たらなかつた。

(お昼休みはいつも教室でゲームしてるつて言つてたんだけどな……)

しかも昼食は総菜パンを適当に胃に詰め込むだけだと。今朝もゲーム資金とやらを切り崩して、コンビニでパンを買ってはいたはずだ。

わざわざ他のクラスまで出向いて男子を昼食に誘うというのは、さすがに恥ずかしくて、これまでトライしたことはなかつた。だが今は世一の食生活が心配だし、無理やり友達を作らせようとしたお詫びも兼ねて——という名目で、千依のお弁当をおすそ分けに来たわけだ。

「あれ、ちーちゃん？」

ふいに目が合つたのは、中学の頃の知り合いだつた。校内では少数派の、高校からの編入組の一人だ。扉にほど近い席で、千依の知らない友達と昼食を囁んでいる。

「あ、ミヨっちゃん。あの、世一知らない?」

「それがさ」

ミヨの目がきらりと輝く。一緒にいる他の女子も、世一の名前にびくりと反応していた。

千依が怪訝そうに眉根を寄せると、ミヨは嬉々として言葉を続けた。

「さつきすつごい綺麗な中等部の子が来て、瀬川くんのこと連れてつちやつたんだよ!」

「え」

「今もみんなとその話しててさー。ホント美人の中の美人って感じで、しかもお金持ちのお嬢様なんだつて。なんか中等部からそのまま進学してきた人たちの間では、結構有名人らしいよ? すごいよねー、瀬川くん。そんな人に興味持たれるなんて」

「え、あの、それって、世一がその美人と二人で、どつか行つちゃつたってこと?」

「うん。まあ、そう言えるかな」

千依の頭の中でぐわんと、鈍い鐘の音が響いた。ミヨが首を傾げる。

「瀬川くんに用だつたの?」

「え、いやつ。べ、別に大したあれじゃないんだ、うん。いないなら、別に……あはは」

引きつった笑顔を浮かべて手を振る千依。

少し離れた席にいた男子グループが「女子が立て続けに瀬川を探しにきただと……」「しかもどつちも美少女……さらにこつちは巨乳……」「間違ってる、世の中の何かが間違ってるぞ……」と恨みがましい咳きを漏らしていたが、千依の耳には届いていなかつた。

「こ、ここのは……?」

中等部高等部共通の部室棟の一室で、世一は畳然と立ち尽くしていた。

部屋の中央には広々としたカーペット、その上に鎮座するのはL字型に組まれた大きなソファとテーブルだ。ソファと向かい合う壁際には、こちらも大型のテレビが備えられている。

そしてテレビ台の中や周囲には、数台のゲーム機が配置されていた。

この学校は一応進学校で、部活動にはあまり力が入っていない。中等部と高等部の区別がない部活も多いし、活動内容があやふやなどころも結構あるのだとか。だがそういう加減さを差し引いても、この部屋の光景は異様だった。

「一体なんなんだ、この部屋?」

世一が信じられない思いで咳くと、隣でルリリが、ふふんと尊大に微笑した。大きく腕を開きながら世一の方を向く。

「どうですか驚きましたか! ここは我が、『実況動画制作部』の部室です!」

「実況動画……つて、ゲームのか? キミ、ゲームするのか?」

「大好きです！」

ルリリはまるで自慢するように胸を反らした。

見た目の印象からゲーム好きというのは少し意外だったが、これでようやく合点がてんがいった。

「実は私、共に部を盛り上げてくれそうな人材を探しているところなのです。先輩の噂うわさを耳にしまして、一度声をかけてみようかと」

噂うわさになるような覚えはないが、知られているなら仕方ない。

世一はふむとはふむと唸うなつて改めてテレビ周辺を見やる。『実況』というからには、自分のプレイを解説やひとり言と共に収録し、動画サイトにアップロードしているのだろう。動画サイトが人気を集め昨今、メーカーが公式に動画化を許可しているタイトルはたくさんある。

「今やゲーム実況者は全世界の人気者です。もちろん、だからと言つてどんな動画を作つても許されるわけではありませんので、実況者のモラルも大事ではありますが」  
ルリリが腰に手を当て、自分も人気者の一人であるかのように胸を張つた。

「なるほど」

「例えば我が部で言えば、ただの動画でなく実況動画であるのは、BGMをそのまま流さないためでもあり、このゲームのここに注目してほしいというのを言葉で伝えるためでもあります。BGMに関してはさほど神経質にならなくていいとは思うのですが、サントラとか出してるゲ

ームだとやはり気を使いますし」

「なるほど」

「まあ、実況ついでに不満を語つてしまふ時も、その……極々たまにないわけでもなくもないのですけど」

「なるほど」

「さつきから同じ言葉しか聞こえてこないのですけど、先輩、興味失つてませんか？」

「失つたわけじやなくて初めからないんだが？」

「なんなんですかあなたはあ！」

ルリリが手をわなわなさせて叫んだ。

「真面目な話をしているのですよ、私は！　日本のゲーマーがそんな体ていたらくだから、和ゲーは衰退したとか言われるんです！」

「おい突然話が大きくなつたぞ」

「これが対戦ゲーなら編集でピー音だらけになつているところですよ！」

「それ対戦相手に暴言吐はきまくつてるつてことだよな？」

「相手には聞こえてないのでいいんです！　最近は負けてもコントローラーぶん投げるのは我慢できるようになりましたし！」

この後輩結構ひどい。

「それよりも！ 私は日本のゲーマーを自任する人々に言いたいのです！」

「な、なんでしょう？」

「もっと熱くなれよと！」

「ちょっと待ってくれ、目を見開いてこっちに寄つてこないでくれ。怖い」

「一人で燃え盛つているルリリに、世一は押し留めるように両の掌を向けた。どうにか落ち着かせようと声をかける。

「熱中するのは結構だが、実況動画を作るのにそこまで気負う必要があるのか？」

「全ては和ゲーの復権のためですッ！」

「火に油を注いだだけだった。」

「ど、どういうことでしょう？」

正直ちょっと引きながら聞くと、ルリリが悔しそうに拳を握った。

「昨今の洋ゲーの台頭には目を見張るものがあり、オープンワールド系やF.P.S.はもはや洋ゲーの天下だと言えます。ですがやはりゲームは和ゲーこそ至高にして究極！ ムキムキした野太い声のおじ様が肩幅広めのヒロインを引きつれてテロリストを鎮圧するより、思春期の少年少女が普段着同然の格好で世界を救う冒險に出る方が、よっぽどわくわくするというものじゃないですか！ ないですくあ！」

「別に否定はしないが、ムキムキのおじさんが機関銃でテロリストをなぎ倒すのがいいって人

も、いると思うぞ？」

「いくらゲームであっても、人に向かって銃を撃つなどもっての外です！」

P.T.A.か。あと和ゲーにもそういうゲームはいくらでもある。

「剣と魔法の世界を舞台にした洋ゲーはどうなる？」

「モンスターのデザインやダメージ演出のグロさが生理的に無理です！ 殺伐としていて、剣と魔法の世界なのに全然ファンタジー感が伝わってこないですし！ 和ゲーのスタイルッシュ、ファンシー、kawa-i-iをもつと見習うべきなんですよ！」

「洋ゲーにもほのぼの出来る笑いがあつたりするけどな。すぐ横で同僚が戦つてるとボーッとしてるだけの衛兵とか。目の前のモンスターを完全に無視するNPCとか。剣しか持つてないのに城の外壁の出っ張りに配置されてる敵の騎士なんて、お前絶対上司に嫌われるだろつて――」

「作り込みが雑なだけではないですか？！」  
「おおじ  
大味と言つてほしい。そういう部分や、癖の強すぎる登場人物などに突つ込みながらプレイするのも、洋ゲーの楽しみなのだ。最近の洋ゲーは作りが丁寧になつていて、むしろ寂しくらいいだ。」

「とにかく、です！」

ルリリがびしやりと言う。

「ビッグタイトル以外にも、良作和ゲーは今もたくさん出ているのですよ！ この部室はそれを世に知つてもらうための、和ゲー復権作戦本部といつても過言ではないのです！」

「いや過言だろ——と思つたが、面倒くさいので黙つておいた。

「まあ、志だけなら立派な気がしないでもないか」

「だけってなんですかだけって！ 先輩はちょいちょい失礼な——

「で、部員は何人いるんだ？」

「ぐ……無視とかされたことないんですけど、この際それはいいです。部員は私一人です。なので建前上は同好会です」

「……えっと、それでなんで部室がもらえるんですかね」

「私の父は、この学校に多額の寄付をしております。あとは、分かりますね？」

恐るべしマネーパワーだ。

「ちなみに備品は全て私が私費で揃えました

マネーパワーだ。

「な、なるほど。とりあえず納得した。しかし活動内容は基本的にはゲームだろう？ ならもつと人が集まつていいんじゃないか？」

「仰る通りです。ゲームをする部活というだけでなく、この私が部長であることからも、当初は入部希望者が殺到しました」

「さらうと自分を上げてくるな、キミは」

「あまりに大勢だったので面接をした結果……」

「世一の指摘を無視して、ルリリは悲しげに頭を振る。

「入部者ゼロとなつたのです」

「どんなシビアな面接をしたんだよ」

「対戦ゲームで私に勝つことを第一条件にしたのが、失敗だったのかもしません。私、誰にも負けませんでしたので」

自分の胸に手を当てて嘆息するルリリ。手の下で、胸部がたわんと形を変える。今さら気づいたが、彼女の制服のふくらみは千依ほどではないが、この年の女子としては大きい方と思われた。

「が、そんなことより——

「ほう。誰にも」

「世一がメガネを光らせる。

「なので、わざわざ足労をいただいて恐縮ですが、先輩にも無駄足を踏ませてしまつた可能性はあるのです」

「ということ？」

「先輩を部に勧誘するためではなく、実力を拝見しようと思って、ここまでお連れしただけで

すので

「まるで僕もキミには勝てない」と言つてるみたいに聞こえるな」

「さあ。それは分かりませんけど。私を前に物怖じしないその態度には、少しは見込みがあるかも思わないではありますん」

わざかに顔を俯げ、ルリリは覗き込むようにこちらを見てくる。その瞳は真剣だった。

先ほどまでのぐだぐだした雰囲気は消し飛び、二人の間に張り詰めた緊張感が漂う。

「先輩。一つお手合わせ、願えますか?」

「いいだろう」

即答して、世一はメガネを押し上げた。

「試されてやろうじゃないか」

両者の合意により対戦種目として起動されたのは、日本が世界に誇るロボットアニメをゲーム化した、シユーテイング対戦アクションゲームだった。

「ま、まさか……」

ルリリの咳きが、勝負の終わりを告げる。一勝負しただけで、既に昼休みも残り僅かになっていた。

カーペットに座った世一はソファの上のルリリを振り返った。ルリリは呆然とテレビ画面を

見つめたままだった。

「まさか私がパークエクト負けなんて……！」

「まあ、勝負は時の運だ」

分割された画面では、世一の機体が勝利のポーズを決め、ルリリの機体が大破している。

世一は肩を竦める。

「一本目は、僕が負けたしな」

勝負は二本先取した方が勝ち、というルールだった。世一は一本目を逃した後、二本連取しだというわけだ。

「も、もう一戦です！」

「いや、さすがにそんな時間はないな。そろそろ昼休みも終わりだ」

世一はコントローラーを置いて立ち上がりた。ルリリが慌てる。

「でしたら放課後に！別のゲームでも私を負かしたら、あなたの入部を認めます！」

「え？」

「べ、別に卑怯ではないのです。やはり一ジャンルだけでは正しい評価は出来ませんし！」

心底不思議そうに、世一は顔の前で手を振った。

「ふあ？」

「入部したいと言った覚えもないが」

「ええ、まあ、はい。——え?」

一瞬躊躇したのち、ルリリが凄い速さで身を乗り出した。

「本気ですか?」

「学校でゲームが出来るのは確かに魅力だが、家でやればいい話だろ? 動画サイトにアップロードとかも興味がない。代わりと言つては何だが、後片付けは頼むよ。僕はもう行くから」世一は身体を横にしてテーブルとルリリの間を抜け、カーペットの端に向かう。そちらではカーペットに上がる際に脱いであった上履きが、揃えもせずに床に横たわっている。

「ちょ、ちょっと待ちなさい先輩! 私の部の、初の部員になれるかも知れないのですよ!?

家柄、知性、美貌と三拍子揃つたこの私の——」

慌て過ぎたのか、勢いよく立ち上がった瞬間ルリリの靴下がカーペットの上を滑つた。

「へう?」

焦るというよりぽかんとした様子のルリリの身体が、くるりと回つて天井を仰ぎ、テーブルに吸い寄せられる。その危機感のない顔に、世一の方が慌てた。

「おい!」

咄嗟に伸ばした腕がルリリの背中を横切つて脇腹の辺りを掴んだ。だが世一もほんと振り

向き様で、支えきれなかつた。世一まで足を滑らせ、どうにか後輩を引き寄せたと思ったときにはテーブルの天板てんぱんが横から迫っていた。

「痛い!」  
肩が天板の丸みを帯びた角に衝突し、鋭い痛みが骨を伝つて駆け抜ける。だがそれだけでは終わらず、世一の身体は反転しながら落下を続けて、今度は反対の肩から床に叩きつけられた。

「さらに痛い!」

立て続けの衝撃に思わず身が強張る。薄いカーペットの上に横向きに倒れたまま、鈍痛の波が引くのを歯を食いしばつて待つてると——

「だ、大丈夫ですか?」

心配そうな声と吐息が、耳たぶをくすぐつた。自分が後輩をきつく抱きしめていることに気づいて、世一はハッとした。

「すまないすぐ離れ——おごっ!」

慌てて身をのけ反らせた結果、後頭部をテーブルの脚に思い切り打ち付けた。倒れるまでのに何十回と天地が回った気がしていたものの、結局はテーブルのすぐ足元に落ちただけだということを忘れていたのだ。

電流を流したような痛みと共に視界に星が瞬く。

「先輩!! 大丈夫ですか!!」

思わぬ追加ダメージに背を丸めたせいでルリリの肩口に額が触れそろになるが、世一は再び身じろぎも出来なくなっていた。

固く瞼まぶたを閉じながら呻く。

「ぐ、う……す、すまない。今、どうから……」

「い、いえっ、悪いのは私ですので、ご無理なさらずにつ」

ルリリは気遣いを見せるものの、その声は裏返つていた。抱きすくめられた緊張からか、世一の耳元で早口で言葉を続ける。

「ホントにすみませんっ。私はどうも運動が苦手でよく転ぶもので、先ほどといい今といい迷惑をおかけして申し訳ないと思つておりますがまさかこんなふうに庇かばつていただくとはつ。それに慌てて離れようとして頭をぶつけるなんて、ちょっととかわいいと――ではなくてつ! その……せ、先輩? まだ痛みますか? え、えつと……」

ルリリの手が世一の背中に回ったかと思うと、躊躇ためらいがちに後頭部に触れてくる。指先が既にコブになり始めている個所を探り当てた。

「せ、先輩はケアル派ですか? ホイミ派ですか?」

「アクアソル」

「魔法じゃない上にトラウマよみがえが甦よみがえつてくるので普通に撫でておきますね。よ、よしよし、です」

撫なででられたためではないだろうが、痛みはじきに消えていった。世一はようやく力を抜き、背中を伸ばした。

目を開けると、当然と言えば当然だが、ルリリの顔が思った以上に近くにあってびっくりした。二人ともカーペットに横たわり、向かい合つて互いの背中に腕を回している状態だった。

後輩が頬を赤くして、上目遣いにこちらを覗きこんでくる。

「良くなりましたか、先輩?」

「あ、ああ。すまない」

「そんなに謝らないでください。悪いのは私だと言つたじゃないですか」

痛みが引いた途端、ほとんど密着したルリリの身体の柔らかさに意識が持つていかれた。世一は後輩の背中に回したままだつた腕を咄嗟に放そうとしたが、成功したのは片腕だけだった。もう片腕はルリリの身体の下に敷かれていて抜けなかつた。

ルリリも世一に抱き付いたまま離れようとしてしない。

沈黙を避けるように世一は口を開いた。

「キ、キミこそ大丈夫だつたか?」

「はい。先輩が身を挺てして庇つてくださつたおかげです」

「別にそういうつもりはなかつたんだが。ただ咄嗟のことだつただけで」

「ふふ、こんな時でも無愛想なんですね、瀬川先輩は」



「そ、それはどうも  
くすりと微笑むルリリの視線に耐え切れず、世一は目を逸らした。  
「じゃ、じゃあ僕はそろそろ——」

「先輩」

身を起こそうとしたところを呼び止められて、世一は視線を戻した。ルリリは優しく微笑んだまま、まだ世一をじっと覗き込んでいた。

「やっぱり初めての入部者は、先輩がいいです」

「は？ いや、悪いが僕は……」

「ですのでこうしませんか、先輩。もう一度勝負をして私が勝てば先輩は入部。先輩が勝ったら私が……」

「なんでも一つ、先輩の言うことを聞きます」

「な、なんでも？」

「はい、なんでも……です」

ルリリの頬は真っ赤に上気し、瞳はうるんで見えた。

そしてそのまま辺りに沈黙が落ちる。部屋の時計がコチコチと針を打つ音と、制服越しに伝わる鼓動だけが大きく聞こえた。二人の間でルリリの胸が押しつぶされていた。足は今にも絡

まり合いそうだ。

「ですから、先輩。私と……」

うつむき加減だったルリリが顎を上げ、二人の顔がより近くなる。吐息すら感じられそうだ。形のいい唇から、誘うような言葉が漏れる。

「勝負ゲーム、しよ？」

「カードゲームみたいに言つな」

「うきやつ」

世一はついとルリリの肩を押して、後輩を後ろに転がした。下敷きになつていた腕が自由になつたところで素早く身を起こす。

「そんな勝負に乗る気はない。ということで、僕は先に行くぞ」

「んなつ！ こ、この箇倉ルリリがここまで言つてているというのになんなんですか、先輩は！ 私を騙したり、逃げたり、そつけなかつたり……と、突然優しくしたり……そして果てはその態度ですか？！ 先輩と会つてから新体験が止まらないのですけど！ ゲームでも負けましたし、なんだか胸の辺りがもやつします！ もやつと！」

カーペットの上で座り込んだまま喰<sup>わ</sup>く後輩は無視して、世一はさつさと立ち上がつた。

「に、逃がしませ——ぬひやあ！」

「それとキミは、もう少し運動神経にステを振るべきだぞ?」

「ちよ、待つてください先輩! セめて一緒に帰るとか——」

「テレビとゲームの電源入ったままだが?」

「ああ、忘れてました。あ、ちよ、先輩! ホントに待たないんですか!? 濑川先輩!」

ルリリが後片付けをしているうちに、世一は自分の鞄だけ搁んで部屋を後にした。

疲れた溜息が、世一の口から洩れる。

「まったくなんだんだ。自分のゲームが出来なかつたどころか、涙を呑んで買った昼食まで抜く羽目になつたぞ、僕……」

「あ、諦めません! 絶対に、諦めませんからあーーーーーーツ!」

廊下を数歩進んだところでルリリの叫びがこだまましたが、無視した。

「よく分からぬクエだつたが、まあ、これで完了か?」

後輩の訴えを本気にせず、世一は肩を竦めた。

NOW LOADING · ·

放課後。

「わあ、世一だ。き、奇遇だね、こんなところで会うなんて」

昇降口で、世一は千依と鉢合わせた。というか——

「僕の下駄箱の真ん前に突つ立つておいて、奇遇と言い切る度胸は買おう」

千依は明らかに世一を待ち構えていた。しかし認める気はないらしく、幼馴染は明後日の方に向を向いてかすれた口笛を吹き始める。

昇降口前はまだ閑散としていた。放課後とはいえH.R.が終わつてすぐの時間。下校する生徒が集まつてくるのはこれからだろう。

千依だつて普段なら、こんなに早くここにいることはない。二人は登校時こそ一緒に来るものの、高校に進学して以来帰りは別々なのだ。

世一は胡散臭そうに千依を見据える。

「今度は何だ? まさかまた友達を、とか——

「ち、違うよつ。そうじゃなくて、たまには一緒に帰ろうと思つただけつ」

「じゃあやつぱり待ち構えてたんじやないか」「う……!」

語るに落ちた千依が一步後退る。世一は下駄箱からスニーカーを抜き出し、上履きと入れ替えた。スニーカーに足を突つ込みながら言う。

「もう。携帯と一緒に帰ろうつて連絡入れてたら、信じた?」

「……………」

「ほら」

「き、昨日が昨日だからな。友達を引きつれてくるんじゃないかと警戒したかもしれないな」  
千依は既にローファーを履いていた。一人で昇降口から、日差しの下に出る。

「無理やりはやめたって言つたのに、どれだけ嫌がるかな……き、きれいな後輩にはひょこひょこついて行くくせに」

「は？」

首を傾げて千依を見ると、なにやら不服そうな顔でそっぽを向いている。

「何の話だ？」

「ぐ、偶然聞いたんだけど、今日の昼休みに……」

「ああ、そのことか」

世一のクラスメートから何を聞いたか説明されると、ようやく得心とくしんがいった。  
「僕もよく分からぬが、部活の勧誘だつたらしい」

「らしいって……そんなあやふやな」

世一が歩きながら昼休みの出来事を話して聞かせると、千依は怪訝とくじんそうに眉根を寄せた。  
「実況動画つて……そんな他人がゲームしてるところとか、わざわざ見る人いるの？」

「超いる」

「そ、そういうんだ」

「僕はあまり見ないし、アップする側になる気もないけどな」

「ふーん。だから断つちゃつた、と」

「そもそも部活動つてもの自体、性に合わない——」

世一は途中で口を噤つぐむ。考えてみれば、部活に所属する機会を自らふいにしたのだ。こんな話をしたら——

(また千依の小言が……)

内心びくびくしながら千依を見やると、予想に反して、彼女は安堵したような顔で小さく微笑んでいた。

「ち、千依？」

「まあ性に合わないんじゃ、仕方ないよね？」

「ああ。だ、だよな」

突然の上機嫌に、なんだかこちらが戸惑つてしまつ。

「お昼まで食べられなかつたなんて、災難だつたね。ど、どこか寄つて行こつか？」

「腹ごしらえにか？ そんな金はないって知つてるだろ？」

「そうだった……まったく、食費削つてゲーム買うなんて、もうダメだからね？」

「了解シマシタ」

「私が抜き打ち検査できるってこと、忘れないように。そのうちどんなごはん食べてるか、見に行くからね」

千依がぴつと指を立て、世一に針を刺した。世一は口をへの字に曲げて呻く。

「合鍵は返してくれよ」

「ダメーでーすっ。これは世一じやなくて世一のママさんから預かつたんだから。返してほしいなら私じゃなくて、ママさんに言つてね?」

世一を見上げて、につこりと微笑む千依。世一が母に訴えたところで無駄なことを、分かっているのだ。

「まったく……」

世一は額を押さえ、諱念の溜息をもらした。視界の端で、なにやら千依が小さくガツツボーズをしている。

「よ、よし。これでご飯作りに行つても不自然じゃなくなつたよね。でもそつなると、まずは料理の勉強しないと……」

幼馴染がぶつぶつと呟くも、よく聞き取れなかつた。



試し読み版は(+)までとなります!

続編はGA文庫「瀬川くんはゲームだけしてみたい。」でお楽しみください! 12月15日頃発売です!!